

平成29年度前期
学生による授業評価アンケート
調査の結果

平成29年9月

志學館大学事務局学務課
志學館大学 I R 室

学生による授業評価アンケート調査の結果

この報告は、学生授業アンケートの結果の概要を示し、個々の教員が、自己の担当科目のアンケート集計結果（PDF版）を基に自己点検・評価をするために必要な統計的情報と、それらの利用法について示すことで、授業改善計画を考える上での参考にして貰うことを目的とする。

1. 調査の概要と資料

今回の質問項目は、以下の10項目と自由記述であった。その他に、科目ごとの学生の学修行動に関する質問があったが、無回答のものが多く分析対象としなかった。

回答選択肢の性格から、Q1～Q3では、中央値の3は「適切であった」ことを意味し、アンケート結果が大小いずれにずれても「多すぎる」又は「少なすぎる」等のいずれかと学生から受けとられたことを意味する。Q4～Q10では、中央値3（Q10の場合は5.5）は「普通」であったことを意味し、これより大きい場合は「よかった」、小さい場合は「よくなかった」と学生から受けとられたことを意味する。

- Q1. 授業の分量（5. 多すぎる⇔1. 少なすぎる）
- Q2. 授業の進み具合（5. 速すぎる⇔1. 遅すぎる）
- Q3. 授業で扱われた内容の分かりやすさ（5. 難しすぎる⇔1. 易しすぎる）
- Q4. 教員の話し方、説明の仕方は適切であった（5. 強くそう思う⇔1. 全くそうは思わない）
- Q5. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった（同上）
- Q6. 毎回の授業のねらいははっきりしていた（同上）
- Q7. 授業は講義要項に沿った内容であった（同上）
- Q8. 授業の内容を通じて新たな発見があった（同上）
- Q9. 質問や意見に適切に対応してもらえた（同上）
- Q10. 授業の総合評価（10. 高⇔1. 低）

自由記述による意見

今期の開講授業数は280であったが、実技を中心とした科目等でアンケート調査の対象となっていない授業があることや、回答なしの授業があったことから、204授業で回答が得られた。このうち回答数が5以上の171授業を分析対象とし、授業ごとの回答の各質問内の平均値の平均値と標準偏差及び標準偏差の平均値を求め、質問ごとに学生からどのように受け取られたか（評価されたか）分かるようにした。回答数が5未満で分析対象としなかった授業は33授業であった。

上記のように回答数5以上を分析対象としたのは、統計学的には資料数が不十分と言えるが、大数の法則が成立するほどの回答数を分析対象とするか否かの閾値とすると、本学の特色である少人数教育授業がすべて分析対象外となるので、これを避けるためである。従って、分析結果の解釈には、統計学的には一定の留保が必要であることを付記する。

大学院学生にもアンケート調査を実施したが、そもそも授業当たりの受講者が少なく、回答者数もごく少なかったため、今回の分析の対象とはしなかった。

2. 調査結果

(1) 回答率

204授業の平均回答率は、0.40であった（全受講者数で全回答数を除したもの。各授業の回答率の平均値ではない）。回答率は授業によって大きく異なり、約50名の受講者で全員回答という授業があった一方、回答者がいない授業もあった。

回答数5未満の33授業の中には、回答率が0.1以下の授業が11授業あった。このうち受講者が最も多かったものでは約80名であり、回答数の少なさは少人数授業のためばかりではないことを示している。

(2) 個票の質問別平均値

個票にある、Q1～Q10までの質問への回答の平均値の、全授業の平均値と標準偏差を、表1に示

す。Q3とQ1で、平均値は3よりやや大きく、学生は内容が難しい、分量が多すぎると感じている傾向が看取できる。ただし、自由記述と対照しながら詳細に見ると、「内容が難しい」との回答は必ずしもネガティブに受け止められているものばかりではないことが分かる。

Q4からQ9では平均値はすべて3より有意に大きく、特にQ5からQ8の平均値は4を超えた。これらは、授業がその内容、授業方法、対応等の面で適切に実施されたと受け止められている授業が多いことを示していると考えた。

個々の授業で、上記の評価からの「外れ」が小さい（平均的である）と判断する目安として、平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差の値を、表1の下2段（表の上・下限値）に示す。個票の平均値がその範囲に入っていれば「ほぼ平均的である」と評価できる（統計学的には厳密なものではない）。

表1 分析対象とした授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
平均値	3.26	2.90	3.38	3.92	4.05	4.03	4.04	4.07	3.91	8.11
標準偏差	0.24	0.23	0.29	0.40	0.35	0.34	0.27	0.31	0.35	0.75
上限値	3.51	3.13	3.67	4.32	4.40	4.36	4.30	4.38	4.26	8.86
下限値	3.02	2.67	3.09	3.52	3.70	3.69	3.77	3.75	3.56	7.36

明らかに優れている又は改善が必要と判断する目安として、平均値 $\pm 1.96 \times$ 標準偏差の値を表2示す（表の上・下限値）。また、この上・下限値の範囲を外れ、「優れている」と「改善が必要である」と評価される授業数を下2段に示す。Q1～Q3では、改善が必要とされた授業はほとんどなかった。一方、Q4～Q10では、改善が必要とされた授業が、質問ごとでそれぞれ4～8授業あった。特に「Q5. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった」か「Q6. 毎回の授業のねらいははっきりしていた」で、改善を要する授業が多かった。

表2 分析対象とした授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
上限値	3.75	3.37	3.93	4.70	4.71	4.69	4.59	4.71	4.63	9.62
下限値	2.76	2.46	2.82	3.18	3.40	3.39	3.49	3.44	3.25	6.73
優れている数	7	1	8	2	4	2	2	6	2	1
改善が必要な数	0	0	1	6	8	8	4	6	6	7

(3) 個票の標準偏差

個票の標準偏差の平均値を、表3に示す。Q1～Q3とQ4～Q9の2つのグループ内では、比較的似通った値で、上記2グループとQ10との3者間では値が異なっていた。これは、Q1～Q3の質問が両極性で、Q4～Q10が単極性であること、Q4～Q9は5段階評価でQ10のみが10段階評価であったことによるものであろう。

質問ごとでは、「Q1. 授業の分量が多すぎる又は少なすぎる」、「Q7. 授業は講義要項に沿った内容であった」かで、標準偏差が小さく、これらの質問では、授業内での学生の反応が比較的一様であったことを示している。

表3 分析対象とした授業の質問ごとのアンケート結果の標準偏差の平均値

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
平均値	0.49	0.57	0.59	0.75	0.72	0.71	0.67	0.72	0.73	1.42

3. 調査結果の活用

回答率の大小の良し悪しは一概には論じられないが、回答率が低かった授業では、授業アンケートに関する学生への説明が不十分であったなど、何らかの課題があり、改善が必要と判断する。

本調査は、授業の改善が目的なので、単に総合評価を見るのではなく、質問ごとに、表1、表2の上限・下限値の範囲を超えているかいないかの視点で、自己点検して貰いたい。特に表2の下限

値を下回る場合には、明らかに改善が必要である。

各質問に対する個票の標準偏差の平均値は、個票の標準偏差が大きいか小さいかを判断する目安に使う。個票の標準偏差が小さい場合、多くの学生が同じように感じていることを意味し、大きい場合、学生の感じ方にばらつきがあることを意味する。

今回の分析では、自由記述による意見の個々の分析は行わなかった。分析では、Q1～Q9の大半で、表2のきわめて悪いには該当しないのに、Q10の総合評価が低いというような授業もあった。自由記述は、このような場合の「なぜ総合的には学生が受け入れ難い。」と感じたかを把握するのに役に立つと思われるものが多かった。一方、自由記述の大半はポジティブな意見であったのに、ある特定の質問項目だけ評価が低いような授業もあった。このような場合は、評価が低かった事項のみ改善すれば、素晴らしい授業となるといった利用も可能である。

回答者が少なく、今回の分析対象としなかった授業についても、Q1～Q10については、表1及び表2の値を基準に、個表の平均値と標準偏差を自己点検・評価に利用することを推奨したい。